

赤十字NEWS

October 2015 Vol.905
<http://www.jrc.or.jp>

10



日本赤十字社

人間を救うのは、人間だ。Our world. Your move.

赤十字新聞 編集・発行／日本赤十字社 企画広報室 〒105-8521 東京都港区芝大門1-1-3 TEL:03-3438-1311 一部20円 赤十字新聞の購読料は、社費に含まれています。

台風18号等大雨災害 救護班などが 被災地で 支援活動



台風18号などによる大雨(平成27年9月関東・東北豪雨)は、茨城県や宮城県を中心に甚大な被害をもたらしました。茨城県常総市では、発災から2週間余りが経過した9月24日時点でも被災者が避難所で生活をしています。体調を崩したり、片づけ作業中にけがをする方も少なくありません。日本赤十字社は救護班による医療支援やこころのケア、奉仕団による炊き出しなど幅広い活動で、被災者サポートを行ってきました。被災者の生活再建へ向けた義援金も11月30日まで受け付けています。皆さまの温かいご支援をお待ちしています。(4-5面に詳報)

CONTENTS

TOPICS	TOPICS	SPECIAL	AREA NEWS	WORLD
第25回国連軍縮会議 Enjoy Honda& 日本赤十字社 ジャーナルコミック発行 健康豆知識 不整脈	いのちと未来をみつめる プロジェクト 元救護看護婦講演会 気象庁×赤十字 防災ワークショップ 長野マラソンチャリティーエントリー 常任理事会開催報告	台風18号等大雨災害 教訓を生かした 医療救護活動 見えてきた 連携・協働の 新しい形	徳島・愛知・静岡・神奈川・香川 島根・山口・広島・山形・静岡 ウガンダ大統領夫人 乳児院訪問 ピアノジャック義援金活動 チャリティーバザー 赤数字回答 Voice&プレゼント	東アフリカへの支援活動 南スーダンでの 医療支援活動 コラム 被爆70年 守るべき いのちと尊厳



今月の出会い



NPO法人 次代の創造工房理事長

秋沢 志篤さん

子どもたちの夢や目標を 一緒に育てましょう

東日本大震災の復興を若者が主人公になって考えていく「STAND UP SUMMIT2015」(8月11日、東京ビッグサイト)の仕掛け人が秋沢さん。「復興には一人ひとりが自分の復興を掘り下げ、実践することが大切。また、周囲のには、被災者の苦しい思いを理解してほしい。そうした機会を作るためのSUMMITです」と語ります。

目標が見つけられない現代の若者の増加に危機感を覚え、2006年にスポーツ選手や芸能人などが参加するイベント企画会社を設立。さまざまなイベントを通じて、子どもたちに夢や目標を持つ面白さを伝えていく会社です。これまでに各界を代表する250人近くの協力

を得てきました*。

その後、新たに立ち上げたNPO法人では、擁護を必要とする子どもたちの海外留学に取り組んでいます。「ヒーローに会ったり、海外交流を経験することで、夢や目標を持つことの大切に気づく子どもたちに会えるのが喜びです」と目を輝かせます。「日赤は、私たちと同じ目標を持って進んで行ける組織。次代を担う子どもに夢を育てていくため、これからも共に力を合わせていきましょう」

*詳しくはSHIRASE心拓塾ホームページを参照
<http://www.shintakujuku.com/lecturer/index.html>

PROFILE

1966年に共同石油に入社。89年エーエム・ピーエム・ジャパンを社内起業し、92年に社長就任。2006年に設立したヒーローズエデュテイメント株式会社で子どもたちの教育支援事業をスタート。6年前に脳梗塞を患い右半身まひの障がいを負うが、懸命のリハビリを経て復帰した。

台風
18号等
大雨災害

教訓を生かした医療救護活動 見えてきた 連携・協働の新しい形

ブロック広域支援体制で対応

今回の支援活動にあたり日赤は「第2ブロック※支部広域支援体制」で臨みました。この支援体制は、首都直下地震などの大規模災害を想定し、準備してきたもの。東京都支部に調整本部を設置し、救護班の派遣や救援物資の調達などで茨城県支部の救護活動をサポートしました。

また、東日本大震災以降、養成に力を入れてきた日赤災害医療コーディネーターおよびコーディネートスタッフを派遣し、他機関と連携した救護活動を展開。支部やブロックに配備を進めてきたdERU(国内型緊急対応ユニット)や現地災害対策本部車両なども活用しながら、地域の医療機能復旧に貢献しました。

※第2ブロック=東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県、山梨県、群馬県、茨城県、栃木県、新潟県



きぬ総合公園(常総市)に設置された現地災害対策本部車両が、日赤の現地対策本部に。各県から参集した救護班活動の拠点にもなりました



「被災地医療の復旧に貢献」

さいたま赤十字病院 救急部副部長 田口茂正 医師

(日赤災害医療コーディネーターとして茨城県常総市に派遣された救護班の情報集約や現地対策本部の立ち上げに携わる)

常総市では市内31カ所の医療機関のうち、最も大きな病院である「きぬ医師会病院」を含む12カ所が被害を受けました。同院と水海道さくら病院は、全入院患者百数十人を自衛隊や消防のボートで脱出させ、各地から集まつたDMAT(災害派遣医療チーム)が県内の病院に医療搬送しました。もちろん日赤DMATもそこに加わっています。

医療機関がこうした被害を受ける中、私たちは今回、日赤救護班として単独で動くではなく、地域の医師会をはじめとする関係機関との連携を重視。避難所の医療ニーズを情報共有したり、受け持つ地域を分担するなどの取り組みを進めました。

医療ニーズは現場で探す

茨城県支部の救護班は9月10日から、埼玉、千葉の救護班は11日から被災地に入りましたが、まず最初に行ったのがDMATとも連携した避難所のアセメントでした。どの避難所にどのくらいの医療ニーズがあるのか、当初はまったく分からなかったからです。

日中の避難所は、被災者の多くが自宅の片づけを行っているので閑散としています。ところが、夜になると大勢の方が戻ってきます。その中には片づけ作業中にけがをされたり、体調を崩した人もいる。アセメントで上がってきたこうした情報に基づき、市内3カ所に救護所を設置しました。

得られた情報はDMAT活動拠点本部とも共有しましたが、それによって、アセメントから抜け落ちた避難所があることが浮かび上がるなど、その後の活動につなげることもできました。

医師会病院の診療再開を支援

地域の医療機能の復旧に動いたのは日赤やDMATだけではありません。県の災害医療コーディネーターを中心に、医師会、看護協会、薬剤師会、歯科医師会などの県内多くの医療関係団体の代表が招集されたミーティングが12日には筑波大学病院内で開催されました。

日赤を代表して私もそこに参加し、日赤の活動を報告。この会議を通じて、県全体としての医療支援の中に、日赤の救護活動が位置づけられることになりました。具体的には、日赤は堤防が決壊した地区を中心に活動。市役所があるエリアは医師会などがカ



医療搬送する日赤DMAT

救護班による避難所アセメントや他機関との連携など、こうした研修で私たちが学んできたことが、今回十分に生かされたと思っています。



バーアしていくことが決まりました。医師会との連携は地域の医療機能の復旧に向けた取り組みを進める上でも重要でした。というのも、浸水被害で機能停止したきぬ医師会病院から「かかりつけ患者の多くは避難所にいる。外来診療だけでも再開できれば…」という相談をいたしました。神奈川・栃木・東京・千葉の各県支部の要員とともに、dERUを14日までに同院に派遣。その医療資機材を用いて、仮設診療所を設置し、同院の先生や看護師の皆さんが外来診療を再開しました。

dERUを用いて、地域の医療機関を補完・支援していくのは日赤として初の試みです。こうした連携は、災害時医療支援の新しい形になるのではないかでしょうか。

生かされた東日本大震災の経験

東日本大震災の経験を踏まえ日赤は「日赤災害医療コーディネートチーム」を平成25年から本社・支部に配備。災害医療コーディネート研修を重ねてきました。また、震災で医療・救護活動の拠点となった石巻赤十字病院での経験を生かすために創設された「災害医療ACT研究所」(事務局:石巻赤十字病院災害医療研修センター内)でも実践的な研修を行ってきました。

救護班による避難所アセメントや他機関との連携など、こうした研修で私たちが学んできたことが、今回十分に生かされたと思っています。

備えの大切さを痛感

自宅で被災した

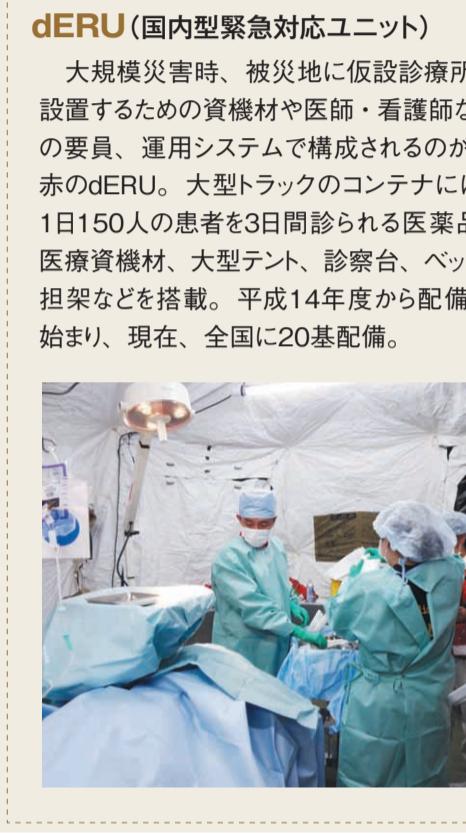
半田ノリ子さん(74)
「今回の災害ではたくさん勉強させられました。何とか持つて来れたのはいつも飲んでいる薬だけ。災害時の備えは本当に大切だと痛感しました」(9月13日、避難していた市役所内)



地域医療調整会議で日赤救護班の活動を報告する田口医師(左)



きぬ医師会病院前にdERUを設置



DMAT(災害派遣医療チーム)

災害の急性期(発災後約48時間以内)に、被災現場での救命医療などを担います。多くの重症者を救えなかった阪神・淡路大震災での経験を踏まえ、国が研究を開始。10年前から隊員の養成が始まり、現在は全国に1369チーム(隊員8305人)が配備されています。このうち日赤は137チーム、851人の隊員を有しています。



被災者の見えない傷を癒す

ここでのケアチーム出動中

多数の家屋流出や広範囲にわたる浸水被害から復旧し、日常生活を取り戻すには多くの労力と時間が必要。その負担を抱える被災者を、心理・社会的な側面からサポートしていくのが日赤の「ここでのケア」活動です。9月24日現在、常総市にはここでのケア2チームが派遣され、県の災害派遣精神医療チーム(DPAT)と連携した取り組みを行っています。

「ここでのケア」が求められるのは、住民被災者にとどまりません。自治体の職員や保健師などは、自らも被災しながら、地域全体を支えていかなければならず、大変なストレスに晒されています。こうした方がたをフォローしていく役割も担っています。



被災者に寄り添い、話に耳を傾けながら、見えないこころの傷を癒します

赤十字防災ボランティア

ボランティアの活動を安全・健康面からサポート

浸水家の泥のかき出しや使用不能になった家具類の運び出しなど、被災者の生活復旧に大勢のボランティアが参加しています。赤十字防災ボランティアはこうした活動への参加と合わせ、安全・健康の専門知識などを生かした支援を展開しました。

1700棟に及ぶ浸水被害を受けた宮城県大崎市では、同市社会福祉協議会と連携を図りながら、ボランティアが安心して活動できる環境整備を実施。赤十字支援隊と名付けられた看護奉仕団などが、活動地域を巡回してボランティアの方たちの安全管理などを行っています。茨城県では、赤十字防災ボランティア4人が被災市町村の災害ボランティアセンター運営を支援し、ニーズのマッチング(活動場所の振り分け)などを行いました。



元看護師のメンバーで組織する看護奉仕団



避難所では地域の赤十字奉仕団が炊き出し。温かい食事を被災者に提供しました



救援物資の積み込みと運搬も赤十字防災ボランティアの重要な役割です

平成27年台風第18号等大雨災害義援金

被災者の生活再建へ 皆さまの温かいご支援を 心よりお願いします

受付期間 平成27年11月30日(月)まで

受付口座 郵便振替(ゆうちょ銀行・郵便局)

口座記号番号「00120-2-766741」/口座加入者名「日赤平成27年台風18号等大雨災害義援金」

※窓口での振り込みの場合、振込手数料は免除されます。

※窓口でお渡しする半券(受領証)は寄付金控除申請の際に必要となります。

※銀行振込み、被災各県支部の口座でも受け付けております。詳しくは日本赤十字社のホームページ(<http://www.jrc.or.jp/>)をご覧ください。



AREA NEWS

阿波踊りで赤十字PR! 支部長、院長、血管くんも



街中が踊り一色に染まる徳島の真夏の祭典「阿波踊り」。8月14日の夜は徳島赤十字病院の「日赤連」約130人が、徳島市内の紺屋町、藍場浜の両演舞場に踊り込み、赤十字をPRしました。



県支部長を務める飯泉嘉門徳島県知事と日浅芳一院長のキレのある踊りに続いて、看護師らが華やかな女踊り、医師らが「ヤットサー」の掛け声にあわせて勇壮な男踊りを披露。先頭集団では、動脈硬化に特化した1泊2日の健康診断「踊る血管 阿波踊り健診」の受診者4人も心電計をつけながら阿波踊りを楽しみました。大観衆を前に飯泉支部長は「徳島赤十字病院ではいのちと健康を守っています」と健診の重要性や赤十字活動への支援を呼び掛けました。

包装食袋の炊き出しカレーで留学生と交流会



藤枝市赤十字奉仕団と青少年赤十字加盟校である静清高等学校の2年生計41人が、プロスペラ学院ビジネス専門学校に通う留学生10人との交流会を8月28日に開催。包装食袋(ハイゼックス)を使ったカレーライス調理と三角巾による応急手当などを学びました。



留学生の一人は「レッドクロスは10歳の頃に勉強して以来。今日改めて学ぶことができました」

参加したのは、ミャンマー、スリランカ、ネパールからの留学生。奉仕団員が生徒、留学生に寄り添いながら一緒に作業し、会場は温かい雰囲気に包まれました。宗教上の理由で肉を食べることができない留学生もいましたが、一人分の材料をボリ袋に入れて調理する包装食袋なら、個々の事情にあった料理も同じ鍋で作れます。そんな利点を認識できる機会にもなりました。

夏のチャレンジ JRCトレーニングセンター(トレセン) 輝く笑顔で 仲間と成長!



集団生活や学習・体験を通じて、「気づき、考え、行動する」力を育むのが、青少年赤十字(JRC)のトレセン。今年の夏も日赤の各支部で開催され、小学生から高校生までのJRCメンバーが、仲間との笑顔の中で、夏の思い出をつくりました。



手を離しちゃダメー! 思いっきりからまった「人間知恵の輪」。一致団結して解けた頃には、みんなの心も体もほぐれます(香川県)



県内84人のJRCメンバーが参加した島根県支部のトレセン(8月6~8日)では、JRCの国際交流事業として来日したモンゴル国青少年赤十字

災害時の判断能力を養う竹ひメンバーハー(高校生2人、赤十字職員1人)を招待。

お互いの国の文化や、学校で取り組むボランティア活動の情報交換をするなど交流を深めました。



青少年赤十字防災教育プログラム「まもるいのち ひろめるぼうさい」を活用した公開授業をトレセンで実践したのは、広島県支部です。8月19日の公開授業には、JRC加盟各校の指導者(教員)

も参加。「災害時に力を合わせること、瞬時に判断することの重要性を学んだ」などの声が聞かれました。



ワークショップで作った紙芝居を発表するメンバー(山口県)

山口県十種ヶ峰青少年自然の家で開かれた山口県支部のトレセンは46人の小・中・高生が参加しました。防災ワークショップや十種ヶ峰登山を含むフィールドワークなどに挑んだメンバーからは、「学んだことを学校で生かしたい」「仲間と協力することの大切さがわかった」などの感想がありました。



神奈川県支部は8月上旬から中旬に小・中・高ごとに実施。計106人のメンバーが参加し、救急法や防災、福祉体験、フィールドワークなど盛り沢山のプログラムに臨みました。参加メンバーからは、「参加前より積極的になれた」「たくさんの『気づき』が力になると感じた」など頼もしい感想が出ました。

防災教育ゲーム「いえまですごろく」 6年生が初体験



愛知県支部は、防災に関する企画や商品開発などを手がけるNPO団体yamoryとともに、防災教育ゲーム「いえまですごろく」を共同製作。9月4日には幸田町立幸田小学校の6年生児童がゲームを初体験しました。



「こんなときどうすればいいのかな?」みんなで協力しながらゴールを目指します

ゲームは、家の外で一人で被災した際、「ものが落ちてけがをする」「困っている人を助ける」など災害時に起りうる突発的な出来事や知識を学ぶもの。体験した児童からは「家に帰って防災について家族で話そうと思った」など、真剣な感想が出ました。同校での学習に先立つ8月23日には、愛知県青少年赤十字指導者講習会でも紹介され、「さっそく学校で実践してみたい」など好評を博しました。

はじめての自炊応援講座 視覚障がい者が料理に挑戦!



日本赤十字社が運営する神奈川県ライトセンターは8月5~7日、これからひとり暮らしをスタートする視覚障がい者を対象にした「はじめての自炊応援講座」を実施しました。自炊を通じた生活の質の向上を目指すのが目的です。



木べらとフライ返し。形を手で確認してから、どちらが炒めやすいかを比較します

講座は、ガス台や水場の配置、調理道具の種類・形などを手触りで確認することからスタート。肉を焼くときの音や匂い、菜箸から伝わってくる重さや感触の変化など視覚以外の感覚を大切にすれば、火を使う料理のハードルもクリアできることを学びました。講座終了後には「ガスは怖いと思っていたけれど、結構できるものですね」「コンロと仲よく付き合っていきたい」などの抱負が語られました。

献血ルームで「夏休み☆親子おりがみ教室」



山形市の献血ルームSAKURAMBOで8月3日、親子おりがみ教室が開かれました。子どもたちに献血を身近に感じてもらい、未来の献血者を育むのが目的。約10人の親子が指輪など可愛らしい折り紙に挑戦しました。



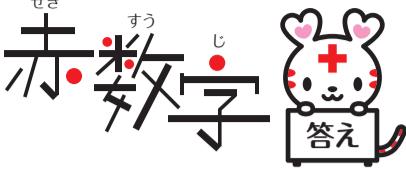
献血推進キャラクター「けんけつちゃん」も折れちゃうんです!

けんけつちゃんカフェオープン 未来のパーティシエと献血コラボ



学生ボランティアと職員がエプロン姿でおもてなし 気軽に献血に立ち寄っていただこうと静岡県赤十字血液センターは8月、県内7つの献血会場で「けんけつちゃんカフェ」を限定オープン。地元の製菓専門学校とコラボしたけんけつちゃんクッキーのプレゼントも。





191人

赤十字語学奉仕団の団員数
(平成27年9月現在)

赤十字語学奉仕団(清水賢治委員長)は、語学を通して幅広いボランティア活動を行う日赤本社直轄の奉仕団。社会人を中心とした学生から高齢者まで、さまざまな世代の団員191人が、障がい者スポーツ大会や青少年赤十字の国際交流活動への協力、来日する障がい者の支援など幅広い分野で活動しています。

同奉仕団のルーツは、昭和39年の東京パラリンピックに向けて結成された通訳奉仕団です。結団式では臨席された美智子皇太子妃(当時)から激励が寄せられました。学生を中心とした約200人の団員が14カ国語の通訳を分担し、世界から集まった車いす選手たちなどをサポート。こうした取り組みを大会後も継続していくと、昭和40年に語学奉仕団として再スタートを切りました。今年11月には創立50周年を迎えます。

5年後には二度目の東京パラリンピックが開催されます。それを受けた新たな活動として語学奉仕団では医療通訳にチャレンジ中。その第一弾として今年2月からは大森赤十字病院の受付通訳ボランティアを始めています。

平成27年度海外たすけあい 事前キャンペーン

「赤十字シンポジウム2015」にご参加ください

毎年12月にNHKと共同で取り組む「海外たすけあい」。その関連イベントとして、世界の人文問題を探る「赤十字シンポジウム」を開催します。今年のテーマは、中東シリアで続く人道危機問題。紛争で犠牲になる市民生活や難民問題、求められる支援などについて考えます。

日時 平成27年11月7日(土) 14:00~16:00

会場 表参道ヒルズ スペース オー(東京都渋谷区神宮前4-12-10)

コーディネーター 出川展恒(NHK解説委員)

参加申し込み方法

(入場無料ですが、事前のお申し込みが必要です)

郵便はがき、FAX、インターネットのいずれかの方法でお申し込みください。詳しいお申し込み方法はホームページ(<http://www.nhk-p.co.jp/redcross2015/>)をご覧ください。

お問い合わせ:日本赤十字社国際部企画課 TEL03-3437-7087(平日9~17時)

Voice & プレゼント

Voice

本紙に寄せられた読者の声をご紹介!

私は高3が初の献血体験でした。その後、途中で妊娠、出産、海外赴任などがありました。現在33回の貢献をさせていただいている。子どもが4人いますが、そのうち3人は18歳で献血しました。1人は機会を逃していますが、けがで何度かの出血をしましたので、「どうせ血を流すなら人のために出せば、けが病気で血を流すことはなくなるよ」(ほかの子ども3人は誰もけがや病気で血を流していないので)と、迷信をも込めながらお説教しています。

—鵜瀬恵子さん(埼玉県)

8月1、2日に放映されましたレッドクロス~女たちの赤紙は大変な反響で、8月3日の朝礼に社長からもこのドラマについて話がありました。敵対する立場の赤十字の理念、理想と現実のギャップのジレンマ、人類はみな平等で平和でなければならぬ。家族愛、さまざまな事柄を今一度戦後70年を迎えて改めて考え直すことができました。貴重なメッセージをありがとうございました。

—森川麻美さん(広島県)

プレゼント

ガクケン(学生献血)応援キャラクターで女優の南沢奈央さんのサイン色紙を2名様にプレゼントいたします。以下の項目を明記のうえ、郵送・FAX・メールでご応募ください。



- ①お名前(匿名をご希望の方は、その旨もご記入ください)
- ②郵便番号・ご住所 ③電話番号 ④年齢
- ⑤赤十字NEWS10月号を手にされた場所(例/献血ルーム)
- ⑥10月号で良かった記事、興味深かった記事はどれですか?(いくつでも)
 - ⑦今月の出会い ⑧第25回国連軍縮会議 ⑨Enjoy Honda & 日本赤十字社
 - ⑩ジャーナルコミック発行 ⑪健康豆知識(不整脈)
 - ⑫いのちと未来をみつめるプロジェクト ⑬元救護看護婦講演会
 - ⑭気象庁×赤十字 防災ワークショップ ⑮長野マラソンチャリティーエントリー
 - ⑯常任理事会開催報告 ⑰特集 大雨災害 教訓を生かした医療救護活動
 - ⑱エリアニュース ⑲ウガンダ大統領夫人 乳児院訪問 ⑳ピアノジャック義援金活動
 - ⑪チャリティーバザー ⑫赤十字 ⑬Voice&プレゼント ⑭ワールドニュース
 - ⑮赤十字NEWSのご感想、扱ってほしいテーマ、その他Voice(読者の声)への投稿もお待ちしています。

応募先 郵送/〒105-8521 東京都港区芝大門1-1-3
日本赤十字社企画広報室 赤十字NEWS10月号プレゼント係
FAX/03-3432-5507
メール/koho@jrc.or.jp(件名「赤十字NEWS10月号プレゼント係」)
応募締切 10月26日(月)必着
※当選者の発表はプレゼントの発送をもって代えさせていただきます。



「こころのケア」テーマに防災ボランティア研修会



兵庫県支部は「こころのケア」をテーマにした平成27年度第1回赤十字防災ボランティア実践研修会を開催。特殊赤十字奉仕団員など赤十字防災ボランティア34人が参加しました。



阪神・淡路大震災を契機

に注目された「こころのケア」。災害時には、被災者だけでなく援助する側も強いストレスを受けることから、こころのケアが求められていることが分かっています。研修会ではこころのケアの必要性や防災ボランティアの役割などに関する講義のほか、被災者役とボランティア役に分かれて行うロールプレイング(役割演技)で、被災者への接し方などを学びました。

ウガンダ共和国大統領夫人が医療センターなどを訪問

ウガンダ共和国ムセベニ大統領とともに来日したジャネット・カーター・ムセベニ大統領夫人が9月11日、東京・渋谷の日本赤十字社医療センターと同附属乳児院を視察しました。



日赤はウガンダ共和国北部の力口ンゴ病院に医師を派遣しているほか、同国赤十字社とともに母子保健事業に取り組んでいます。視察を終えた大統領夫人は、日赤の医師派遣に感謝を述べるとともに「今後も医療従事者、特に医師や看護師の派遣を望みます」と話しました。

「東日本大震災を忘れない」→Pia-no-jaC←の2人ライブを通じた義援金募集を今年も継続中

ピアノを弾くHAYATOさんと力ホンを叩くHIROさんのインストゥルメンタル音楽ユニット「→Pia-no-jaC←(ピアノジャック)」。東日本大震災の義援金を募る「ピースバンド」をライブ会場で販売し、収益金を被災地へ届ける活動を現在も継続中です。



2008年にデビューしたピアノジャック。オリジナリティ溢れる演奏が注目を浴び、ライブ会場には子どもから大人まで幅広いファンが足を運んでいます。ピースバンドの取り組みは震災の翌月からスタート。今年4月までに日本赤十字社に寄せられた義援金は約300万円になりました。9月に東京や大阪で行われたライブでも大勢のファンに協力を呼びかけました。

13th album「BLOOD」12月9日(水)発売 XQIJ-1011/1944円(税抜)
ライブ予定などはオフィシャルホームページ(<http://pia-no-jac.net/>)をご覧ください

大真協会がチャリティーバザー売り上げを寄付



大真協会の主催によるチャリティーバザーが9月5日、目黒区内で開かれました。

大真協会はこれまで、日赤本社内で行われている12月の「海外たすけあい」バザーに参加してきました。今回のバザーは「これまで以上に協力したい」という同協会の申し出から実現したもの。バザー開催前には、赤十字の国際活動について会員の理解を深めるため、国際部職員が講師を務める研修会も実施されました。バザーには141人が来場。売り上げの約23万円は海外救援金として寄付されます。

*「海外たすけあい」は毎年12月に日本赤十字社とNHKが共同で取り組む募金キャンペーンで、今年も12月1日~25日まで行われます。

WORLD NEWS



東アフリカ諸国と日本赤十字社 「各国赤十字社の成長を促す支援をこれからも」

日本赤十字社国際部 東アフリカ地域代表(ナイロビ駐在) 五十嵐真希

地域紛争と難民、干ばつなどの自然災害、貧困と劣悪な保健衛生環境…。東アフリカ諸国^{*}が抱えるこれらの課題に対し、日本赤十字社は保健衛生などを中心とした支援活動に取り組んでいます。日本赤十字社の東アフリカ地域代表として各国赤十字社や関係機関との調整などを7年間にわたり担当してきた五十嵐真希さんに話を聞きました。

^{*}ウガンダ、ケニア、ソマリア、ブルンジ、タンザニア、ルワンダ、エチオピア、南スーダン、ジブチ

無限大の支援ニーズ

ケニアの都市部など経済成長著しい地域もある東アフリカですが、課題はまだ多くあります。日赤が地域保健強化事業に取り組むケニアの支援地の村では、子どもやお母さんが、乾季には川底を掘り、水をタンクに入れ1キロから5キロも歩いて運びます。重さは一つ20キロ。内戦でタンザニアなどに避難していた難民が戻ってきており、ブルンジでは、文字通り人びとは無一文で帰国。ソマリアやケニアではイスラム武装勢力によるテロ事件が頻発しています。ウガンダでは妊産婦死亡率がいまだ高い状況です。

日赤はウガンダで母子保健事業や医療支援事業、ケニアでは地域保健強化事業を進めるほか、国際赤十字・赤新月社連盟(IFRC)を通じた難民・帰還民支援、保健衛生、栄養や生活向上の支援などにも取り組んでいます。

支援を円滑に進めるには地域住民の信頼を得ることが重要です。住民自身が「何をしなければならないのか」を考え、実行していくことが大切で、そのためには信頼関係に基づく協働が欠かせません。

日赤の保健衛生事業はこの考えに基づいて進められてきました。地元ボランティアの地道な育成を通じて、住民に保健・衛生の知識を普及。それによって、人びとの意識と行動を変え、医療機関での出産率や幼児の予防接種率の改善につなげています。

住民と赤十字の「夢」かなう

現地の人びとの粘り強さと、日赤の支援が結実した成果として、今年8月には支援地の一つケニアのガルバチューラ県立病院に手術棟がオープンしました。

今までこの病院では簡易な処置しかできず、帝王切開や手術には100~200キロメートルも離れた他県の病院まで患者を搬送。救えるはずのいのちが失われるケース

が多くありました。地域の医師からこうした実情を訴える手紙を受け取ってからオープンまで5年。現地の関係者も私たちも本当にたくさんの方々の困難を乗り越えてきました。

保健省の医師が「砂漠のオアシス」と表現したこの手術棟には、地域住民や多くの関係者の熱い思いが結集。周辺地域を含めた住民10万人のいのちを守る砦になってくれると信じています。

長期的、包括的な支援を

東アフリカ諸国の政情が不安定で、行政が役割を十分に果たしていない現状から、危険地域に入り切る唯一の人道支援団体として赤十字に対する期待はさらに高くなっています。ところが、社会が安定しない結果、各国赤十字社も十分な力を付ける



ケニア赤十字社のさまざまな広報に五十嵐さんの写真が使用されています

余裕を持ち得ていません。ですから、私たち日赤や国際社会の支援が不可欠。もちろん、支援は各国赤十字社の成長を促す方法で進めなければなりません。

7年間のアフリカの砂埃にまみれた汗と涙の結晶として、日赤は東アフリカにとって重要なパートナーになっています。これを土台にして、医療や保健だけではなく、日赤の持つさまざまな資源を生かした包括的で息の長い支援関係を築いていくことが今後期待されると思います。

南スーダン紛争 ICRCが医療支援活動 赤十字の人道精神を胸に

熊本赤十字病院 大塚尚実医師

内戦が続く南スーダンで赤十字国際委員会 (ICRC) の医療支援活動のスタッフとして派遣されていた熊本赤十字病院救急部の麻酔科医、大塚尚実さんがこのほど帰国。医薬品や医療機材が不十分な環境下での救護活動について報告しました。

「アフリカ最長の内戦」といわれたスーダン内戦。10年前の包括和平合意を経て、2011年7月に南スーダン共和国がスーダンから分離独立し、2013年には南スーダン赤十字社も承認されました。しかし、独立からわずか2年半後の2013年12月には民族間の衝突が発生し、南スーダンは再び紛争状態となっています。

ICRCは、南スーダン赤十字社と協力し

て、首都ジュバなどにある病院で医療支援を行っています。日本赤十字社も継続して医師や看護師を派遣しており、大塚さんは7月から約2ヶ月間、ジュバの軍人病院に拠点を置き活動。また、移動外科チームの一員として、上ナイル州南部の基幹病院として唯一機能している、マイウットの病院にも派遣されました。

「患者は若い兵士がほとんどです。多く

は戦闘により銃創などの傷を負っていて、一日平均3~5件の手術麻酔をこなしてきました。負傷して運ばれてくる兵士の中には『けがが治ったらまた戦う』という人もいます」

負傷兵の救護は赤十字の原点。その精神を胸に治療を続けた大塚さんですが「兵士の治療が内戦の加担にならないのかというジレンマを感じることもありました」と振り返ります。

先進国とは異なる医療現場への戸惑いもあったといいます。「薬剤は古典的なものが多く、使用に慣れるのが大変。また麻酔器や人工呼吸器がないため、必要な場合には手動の器具を使って人工呼吸を行います。五感を駆使した患者の状態把握が求められました」



手術麻酔を行う大塚さん(左)

紛争地域での医療支援活動には各国から派遣された医師、看護師が参加します。「彼らは生活が制限される中でも最大限に楽しめることを探し出すのが上手でした。緊張感のある環境でも心の余裕を持つことが大切だと感じました」と多国籍チームから学んだ点についても報告しました。



二十歳の青春に ~長崎、救護看護婦が目にしたもの~

「大勢の患者の中でわが子をしっかりと抱きしめ眠ったままの姿で死んでいる母親、その母親の乳房にむしゃぶりつき、泣きじゃくっている乳児、死んだ者が苦しかったか、生きている者が苦しいのか、この時から皆の苦しみが始まったのです。昇天した人をムシロで包み川端で焼き、ただただ亡くなった人に心から念仏を唱えるだけでした。(中略) 来る日も来る日もこんな勤務でした」(中辻典子、当時大阪日赤救護看護婦養成所一年生、四月に入学し数カ月しか教育を受けられないまま戦争の激化に伴い郷里の長崎県西彼杵郡に帰省中だった。手記は市内の救護所で目にした出来事)

「亡くなった母親の死体が大八車で運び去られるとき、傷ついた少年は起き上がるこどもでさす自分のそばから永遠に去って行く母親の悲しい姿をじっと見送らねばならなかったのです。あの悲しそうな、そしてあきらめきった眼差し、原爆救護を回顧するとき忘れえないひとこまです」(上別府ケイ、日赤救護班要員として諫早から汽車で長崎入り)

「食事をする暇もなく私は病棟と手術室の廊下に立って、この方は手術室へ、ああこの方は向こうに(死亡)、この人は病室へと、多くの方を振り分けたのが思い出されます。病院の全職員不眠不休で、何百人の負傷者を

同時に収容、救護に専念しました。一夜明けて、広間の病室に患者さんの様子を見に行きましたと、息絶えている人、髪の毛が抜けてぼうぜんとしている人、全身やけでだれがだれやらさっぱりわからない人、腰のまわりだけシーツをかけているおばあさん、みんな語る言葉を忘れていました」(大久保キミヨ、昭和17年に日赤救護班要員として召集、大村海軍病院勤務)

「死に直面した人が苦しみのあまり早く死にたいと思ってか、『看護婦さん早くゴザを持ってくれんね、それに載せて下さいよ』と手を合わせるので(当時病院では、死亡したらムシロに載せて死体安置所に運んでいた)なだめるのに苦労した。夜勤一人で、一生懸命ほとんどその人にかかりきりでした(中略) 感傷にひたることも許されない時代でした」(長谷川和子、昭和19年日赤救護班要員として召集、佐世保海軍病院勤務)

「昭和二十年、私は二十歳で、大村海軍病院に救護看護婦として二年目を迎えていました。(中略) 暗い夢のない記録ではあるけれど、原爆のすさまじさを体験した二十歳の青春に、燃えた若さを今は懐かしく思うばかりです。(内田良子、「当時の日誌から」と題した手記に寄せて) (『閃光の影』で原爆被爆者救護赤十字看護婦の手記)」



日本赤十字社第362救護班要員(長崎県支部提供)